しゃらりん 03 2003/7/1
大阪教区教化委員会機関誌［沙羅林］

教区基本テーマ

私のこと 知らないままで いいのかな。

石川よし子さん(54)

この世に出生し、50余りとなりますが、自分のことを知っていたとは思えません。でも、自分の性格を、振り返ったことはあります。
嫌な性格、好きな性格が出てきます。そこには、人との関わりが伴ってわかる性格でもあります。近頃は、年の節目で変わる体調の落差に気付き、病気に敏感になり、命が永遠でない事を理由に、楽しく、充実した人生を送りたいと。やっぱり、自己の身の拠り所を求めて、自分をコントロールして付き合っていくことでしょう。

(第６組　淨教寺)

洲崎美裕己さん(38)

何を書こうかと考えていたら、戦争を無くす方法を思いついた。
子どもの頃から私は誰からも好かれる、いわゆるいい人にみられたかった。
大人になってからもその傾向は残った。
人に嫌われないように努力していた。
しかし､果たしてこの世界に誰からも好かれる、そんな人間が存在するだろうか。
大人になるにつれ現実を知り、様々な些細な挫折感も味わい、それを望む事が不可能だという事に気がついた｡もっと早く気づいても良い筈だった。
でも人から好きになられなくても、いくらでも好きになる事は出来る筈。人の良い所をたくさん見つけたら、その人の事を必ず好きになれる筈。実践してきた者が言うのだから絶対正しい筈。
で、一案。
自分に心からの好意を寄せる者に人は攻撃できるものであろうか？
その辺から始めたら世の中ケンカも、それこそ戦争もなくなるのでは？
ブッシュさんに一筆書いてみようか？などと考える能天気な私であります。（第13組　即念寺）

佐々木央子さん(42)

自分を振り返ってみることがある。それは、主に自分のとった言動についてであって､そして心に引っかかる事がある時が多い。頭の中ではわかっていても、感情に左右されて、裏腹な行動や発言をしたり、調子にのって周りの状況がよめなかったり、そんな自分の姿ばかりが浮かんでくる。
人のことはたやすく批判できるのに、自分はどうだろう？と、取りあえずは反省してみるが、たいていの事にはいろいろな理由をつけて自分を正当化してしまっている。自分は客観的に見ても、「好きな私」ばかりでなはない。
でも、大切だと思う。
そして、社会の中で人と関わっているからこそ「私」のことを考える。そのためにも「私」は一人で生きている「私」ではない、ということに気付きたいものである。そして、その中で「私らしさ」を見つけていきたい。　（第27組　信證寺）

建部 公美さん(26)

毎日、自分の外に目は向けているけれど、内に目を向けることはほとんどない。
日頃から、相手の立場に立って物事を考えるようにしようと心掛けてはいるが「自分のため」という頭がどこかにあるように思う。
他から見た私ってどんなだろう？と考えることもあるが、それもただ外見面だけでのことのように思う。「自分の内に目を向ける」すごく難しい。
夢にみるまで自己を問いつめ、法然上人と出遇われた親鸞聖人｡そういう出遇いに私も遇いたい。けれど、ただ待っていても気付かないように思うので、自分から人や教えに触れていきたい。
「自分を知る」とても大きな課題ですが、私のこれからの人生を貫くテーマになりそうです。

(第７組　教應寺)

1p 教区内の方々に、教区基本テーマを聞いて感じることを綴っていただきました。

2p BOOKSしゃらりん堂
●私の一冊

3p ホームページ「銀杏通信」の新コーナーを紹介します。

4p シリーズ　聞く
●人権学習『「同和」問題に学ぶ会』

5p 教区真宗本廟奉仕団のレポートと参加者の感想を紹介します。

6p 教区内諸団体の活動を紹介します。今回は、教誨師会と保育協会に寄稿いただきました。

7p 教区アラカルト
●第22組「和泉国寄講」の様子をご紹介します。

8p 南御堂周辺のお店紹介「ちょっといこか」と、マンガ「しゃらりんちゃん」。

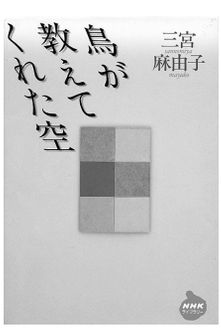
BOOKS しゃらりん堂 新企画

子ども達の大好きなクレヨンのお絵かき、退屈のあまり飛び出した黄色君が見つけたのは、大きくて真っ白な画用紙。赤さん、ピンクちゃん、緑君、黄緑さんと次々に友達を呼んで、蝶々やお花をいっぱい書いて大喜び。仲間に入れてもらえず、ひとり寂しく残された黒君。でも最後には、とってもうれしい驚きの展開に！

「池中蓮華　大如車輪　青色青光　黄色黄光　赤色赤光　白色白光」。様々な色彩の蓮華の花。青い花は青い光を放ち、黄色い花は黄色い光を放つ。「他と違っているのが当然なんだ。他のに合わせずに自分の色で輝いたならば、それこそが美しく、素晴らしいことなんだ」。そして、「この世に生まれ出た存在には、何一つ存在意義のないものはないんだ」とそんな事が、身近なクレヨンを通して伝わってくる。そんな心が、元気になる絵本です。

『くれよんのくろくん』
作画・なかや　みわ
童心社
1,200円

推薦／第７組浄圓寺 平林正見さん



『鳥が教えてくれた空』
作・三宮麻由子
NHK出版
830円

半年ほど前、お参りの途中の車の中でラジオを聞いていると、ある女性のエッセイストが話していた。

すずめの鳴き方によって、今何時ごろかわかるんです。鳥の鳴き方によって今日の天気がわかり、出かけるときの服装を決めると語っていた。

そんな人もいるんだと、早速彼女の本、『鳥が教えてくれた空』を買った。三宮さんは、４歳のときに失明し、ピアノ・英会話へと積極的に取り組んでいく。そんな中で出会ったのが、バードウオッチングであった。

彼女は、野鳥を知ったとき、対象物であった世界が、自分の手につかめる「入ってくる」世界から、宇宙の大きなペースで流れる世界に「入っていく」。それは世界観を完全に覆す大事件となった、と語る。前に歩くことばかりでなく、立ち止まることを覚えると、鳥たちの声が立体的に聞こえ始め、鳥声は耳で聞く景色になってくる、とも語る。ハンディを持ちながら、さまざまな発見をしていく彼女の生き方を読みながら、いろんなことを考えさせられる。

推薦／第１６組慈願寺 鹿崎正明さん

銀杏通信の新コンテンツ『生きてるって素晴らしい』を公開開始

ホームページ部／インターネット法話実行委員会

大阪教区のホームページ『銀杏通信』に、新しいコーナーができました。題して「生きてるって素晴らしい」。「インターネットでの新しい法話」のスタイルを模索する中でできあがったものです。インターネットという新しい媒体ならではの取り組みや問題点、またそこで我々が活動していく意義などについて、報告いたします。

教区内の「おたく」の吹き溜まりと化しつつあるホームページ部。今回は、オリジナルの動画作りに取り組んでいます。制作する上でのポイントは2つ。インターネット時代の新しい教化伝道の手段を模索すること。そして、予算がないので全部自分たちで作ってみる、ということです。

ネット時代の「法話」

誰でも、どんな場所からも、どんな時間でも、自由に情報を見ることができるというのがインターネットの特徴です。そこに境界は存在しません（日本語という言語的な敷居はありますが）。

そういう特徴を考えると、教区のホームページ『銀杏通信』も、「外向き」であるべきだ、というのがまず私たちの前提でした。年齢。性別。国籍。立場。あるいは信じる宗教。そのような「境界」を超えたものを作り上げること。そしてそれを誰にでもわかる言葉で語ること。それが私たちの目標です。

また、インターネットのもうひとつの利点として「双方向性」がよく挙げられます。「言いっぱなし」ではなく「対話」。言ったことに対して読み手から何かが返って来、そしてそれを踏まえながら新たな展開を考えていく。そういう一方通行ではないあり方を模索したいとも考えています。

このふたつの特徴を踏まえて、テーマを「生きてるって素晴らしい」、サブテーマを「死について」とし、第1回目は藤澤隆章師（第16組泉證寺）と教区内の20代の若者3人とのディスカッションを約15分の動画にして発表しています。

また、これを観ていただいた人からのご意見も同時に載せ、自由に話し合っていけるような仕組みも盛り込んでおります。

自分たちで作ってみて

収録は、完全に自分たちの手で行いました。上の写真を見ていただいたらおわかりだと思いますが、照明は物干し竿をガムテープで止めたもの、持ち寄った家庭用ビデオカメラ3台を同時に回し、のちに委員のパソコン上でそれをデジタル編集いたしました。

最初はたくさんのカメラを向けられ緊張気味だった出演者の皆さんも、時間が経つにつれスムーズにお話も出だして、約1時間の収録はあっという間でした。

しかし実はそれからが大変でして、それを15分の動画、しかも筋の通ったものに編集しなければなりません。またカット割りも考えなくてはなりません。

デジタルビデオの普及とパソコンの高性能化で、プロ並みの編集が家庭でもできるようになりました。みなさんの中にも家で撮ったビデオをパソコンに取り込んで編集なさっている方もいらっしゃるでしょう。

ただ、やはり動画を作るというのは難しいものだというのが実感です。今後ノウハウを蓄積し、各自のスキル（腕前）も上がっていくことによって、だんだんと見た目もよくなっていくことと思います。またそういう技術自体も教区に還元していかなければと思っています。

まずはインターネットができる方はぜひ一度ご覧になってみて下さい。そして、お感じになったことをご投稿ください（匿名でかまいませんので）。

それら寄せられた意見を踏まえながら、次の作品を作っていくことになります。

みなさんの声と、動画作品との相互交流によって、「生きてるって素晴らしい」は本来の意味を持ち、そこに新しい「教化伝道」も興ってくるのではないか。私たちはそう期待しているのです。

（ホームページ部／澤田　見）

●『同和』問題に学ぶ会
テーマ「同和」問題は終わったか？

講師／谷　真理　先生

谷真理さんのお話しをお聞きしたのは初めてでした。ポツポツとゆったりとした口調で話される中で言われた、「部落解放運動は、人間が人間を解放する運動ではないと思っている」という言葉が、なぜかとても胸に残りました。

「部落解放運動」というのは、被差別部落が解放されるための運動・・なのでしょうか。でも、本当は「訴えが受けられない私」が解放されることを願われた運動だったのではないかと、このごろそう思うのです。

差別はおかしい、差別は無くさなければ……なんて、人間に生まれたなら誰だって知っていると思います。でも、差別は無くならない。差別をつくったのは人間です。「人間」というなにものかが、どこかにいるのではなくて、私と同じ「人間」です。差別をつくりながら、差別に痛み苦しむ。それなのに差別が見えていない、気づいていない。そんな思いすべてが、一人の人間「私」の中にあるのではと思うのです。

谷さんがおっしゃった「人間が人間を解放する運動ではないと思っている」という言葉によって、そういう人間の「危うさ」を見つめ直すことになりました。でもきっと、もっと深い思いが込められているのだろうと思います。その思いを尋ね続けていきたいと思います。

（第22組光泉寺　三帰裕子さん）

■講義要旨

「同和問題は終わったか」というときに、「同和」問題という問題をどのようにとらえるのか。また、その問いかけは、誰が誰に何のために問いかけるのか、ということの確かめが必要なのではないかと思います。

同和問題というのは、「部落差別問題」です。差別を受けてきた人々が、何百年かのその恨みをはらすということではなく、人間を尊敬することによって、自ら解放せんとするものの集団運動を起こし、それが、部落解放運動として今も取り組まれています。私たちが、同和問題という時には、部落差別問題とその部落解放運動を総合的に表現していることが多いと思います。被差別部落の問題ではありません。部落差別を支えてきている側の我々の問題です。

大谷派は、幾度にもわたる糾弾を受けて、気づかないということの差別性に気づかされました。また、糾弾を縁として、宗門の制度、機構、教学、教化のもつ問題点を点検検討しました。しかし、それは解決・克服されないままに、先送りされているのが現状でないかと思います。つまり私たちは、足を踏まれた人が痛いと声を出してくださったから、踏みつけていることには気づきました。しかし、直ぐに足を除けたかというと、その足はそのままにしているというのが現実の姿でもあります。

私は、部落解放を人間解放と考えてきました。しかし、今は、人間が人間を解放する運動ではなく、如来・諸仏の本願のはたらきにより、私自身が失っている人間（人間性）を回復する縁なのだと受けとめています。

私たちは、同朋会運動を40年推進し、糾弾に応えんとして、同じように40年あまり同和問題に取り組んできました。一人ひとりが自己を問うものとして、真剣に教区で組で寺で取り組まれてきました。このことに偽りはないと思います。しかし、その自己を問うということが、教団の教区の組の寺の学習の教化の目標になっていたのではないのか、はたして我が身は、自己を問うたのか、と思うのです。誰が誰に何をどうしようとするものだったのか、実は、いちいち確かめることなく自明のこととして、曖昧にしてきたのでないかと思います。ですから、私は、同和問題は私の中で終わったとはとても言えません。そのことをはっきりさせていかなければならないと思います。

同和問題が視座・視点となり、さまざまな人権の問題への取り組みが生まれました。それは、私の背中を押してくださった声があったのです。そうすると、お釈迦様に親鸞聖人に諸仏に、そして、糾弾してくださった人々に、私はどうしたいのかということを、確かめ、表明していけばいいのでないでしょうか。「同和問題は終わったか」というテーマで学習をされる。それが、大阪教区の同和問題の取り組みの歴史であり、現状であろうと思います。けれども、そういうところにいるからこそ、誰が誰に何をどうしようとするのか、そのことをお互いが確かめ合う、時と場をもっていただければと思います。別に新たな、どこかに入口出口があるのでなく、そういうことよりも、すでに私たちに開かれている教えそのものを、もう一度受け止めなおしていけば、はっきりするものがあるのでないかと思います。

（文責・教務所）

教区真宗本廟奉仕団

2003年4月19～20日／5月9～10日

教区教化委員会主催の真宗本廟奉仕団が、4月19～20日に行なわれました。

現代（いま）の日本社会において、真宗教団は、退廃していると言いざるをえません。まさしく、日本全土が、真宗の開教区であると私は思います。そんな状況の危機感の中で生まれてきた同朋会運動、そして、真宗本廟奉仕団でありますが、いったい、現代（いま）の民衆にどのように応えているのかぜひ見てみたい、そして私の問いにどのように応えてもらえるのか、それらの期待を胸に参加させてもらいました。

20代半ばの私にとって、真宗本廟奉仕団に参加している顔ぶれは、やはりおじいさん、おばあさんがほとんどでした。そして、夕事勤行の後に行なわれる感話を聞いていても、何かしら、白々しいものを感じました。同朋会運動、そして、真宗本廟奉仕団は、本当にこれでいいのかとさえ思いました。

しかし、これだけ多数の人々が、本山（真宗本廟）に足を運んでくれている事実を目の前に、寺への期待は、まだなんとか残っているのだと実感しました。

だが、すでにあぐらをかいている時期は終わった。もう一刻の猶予も残されていない。私たちが、これからどのように教化活動に取り組むべきなのか、僧としてどのように生きていったらいいのか、それを考えさせられる機会を今回の真宗本廟奉仕団の体験でいただきました。（貴子）

参加者のご感想

第3組受念寺門徒　石橋通子さん

大きなお風呂気持ちよかった。本山は、母の待つ故郷のよう。出会った人は、その時から友になり、心から話すことができた。いま、私が、ここに、この場にいることの不思議をしみじみありがたいと思いました。ようこそ、ここまで私を育ててくださった、よき先輩・よき友・よき師。本山は、不思議な場だとつくづく思います。

「生活の中に仏法を聞く」、いつもいつも、くり返しくり返し教えていただいていることをあらためて思い返しています。

「生ききること」が「死にきること」ということ、そのことを常に思うようになれた。（歳のせいかな？）聞法が深まったからではないけれど、やはり「死」を思うことが、身近に起こることが多くなったせいかもしれません。

第7組光満寺住職　越谷　彰さん

本廟護持に対して、現在のような奉仕団の在り方を考え直す必要があるように思う。確かに聞法することの意義が大切であることはわかるが、これだけでは本廟の維持は難しいのである。

自分自身を含めて、僧侶の体質改善が望まれる。寺にかかわる人々が、本当に心から体を動かし、生きていることを問いなおし、今ここに在ることが喜びとなるような運動の展開をしなければ、やがて衰退の道を歩むこととなると感じるのである。

この問題を自分自身の課題として、寺・僧侶・門徒の在り方を考えていきたいと思う。

第8組念仏寺門徒　宮野　勲さん

初めて本廟奉仕団に参加させていただき、来て良かったというのが、第1の感想です。今までに、2度しか本廟に来たことはなかったが、御影堂と阿弥陀堂しか知りませんでした。多くの建物を知ることが出来て良かったと思います。

次に参加の皆さんが、真剣に生き方について、意見を述べていらっしゃる姿を見て、自分ももっと努力して、親鸞聖人の御教えを勉強したいと思います。

第17組念正寺門徒　沢田秀子さん

初めて参加させていただきましたが、内容の充実度に驚き感動いたし、少しハードですが又のチャンスも是非参加したいと思います。

先ず「真宗宗歌」や「みほとけは」のお歌に心ほんのり、合掌しての昼食（食べること、作ることの尊さを感じ）、両堂参拝や諸殿拝観等すばらしい建物・お庭・襖絵・時代劇に出る大広間・お床・武者隠し、見学や説明等いただきました。我宗、東本願寺本廟にこれほどの財産があるとは。

ちょっと難しい講義、班別座談会では、日頃私も疑問に思っていたことが解決されました。法名もいただけ感動しています。

各種団体活動報告

教誨師会

教誨師は宗派内で推薦したメンバーで、各種宗教団体で構成した府県の教誨師会に登録します。篤志面接委員は、各施設長の推薦により法務省の矯正管区長委嘱によるものです。大阪教区教誨師会のメンバーは現在26名で、大阪刑務所・大阪拘置所・大阪医療刑務所・浪速少年院・交野女子学院・和泉学園・奈良少年刑務所・奈良少年院・和歌山刑務所・大阪少年鑑別所の10施設に年間５００回前後訪問しています。

まず成人の施設での活動を紹介しましょう。

被収容者からの希望によって、教誨室にて読経（被害者や家族の命日）と法話の時間をもちます。個人だけとグループの場合があります。個人の場合は、その都度被収容者が願い出たときに、グループは、施設の方から被収容者に広告して希望する人が出席します。また、収容されている間に学習したい人を対象に、家族への手紙を出させるように読み書き、出所後子どもの宿題ぐらいは見ることができるように算数の学習の手助けもしています。出所の後、組関係に戻らないように暴力団離脱指導が施設によって行われています。そのカリキュラムの中で、家族のことや本人の自覚にかかわる項目のところを受け持っています。

少年施設では、個人面接が中心となります。少年たちが悩み苦しんでいることについて相談にきます。また環境に問題がある少年の指導にあたることもあります。

浪速少年院・和泉学園では、仏教クラブを開設しています。余暇の時間を使って希望する少年たちと、仏陀釈尊伝を中心に学習しています。10～15分ぐらいの基調法話の後30～45分の座談会をもっています。少年たちは、非行を重ねていた過去のことや、社会へ帰って行ったときの将来の夢、また施設内での今の心の葛藤などを話しています。この仏教クラブは、当会員以外でも参加できますので、ご希望があればご連絡ください。

当会では、公開の講演会や、施設訪問も企画していますので、ご参加いただきますようお待ちしています。

（真宗大谷派大阪教区教誨師会長　北畠　顯諒さん）

和泉学園への施設訪問

保育協会

現在、保育協会には、３０ヵ園の幼稚園と保育園があります。昭和８年に創設されたのが最初で、多くは戦後にはじめられました。真宗の教えを子どもに伝える目的もあるが、特に戦後の物のないときに、「衣食たって礼節を知る」の例のように、真宗保育を通して精神的な支えを持ち、立派に成長してほしいとの願いを持って保育に携わって来ております。今約４５００人の園児が、各園に通っています。保育園では、長い子は6年、幼稚園では3年います。

園での生活の一端を述べますと、昼食のとき園児が合掌します。「仏様ありがとうございます。お家のお父様お母様ありがとうございます。よく噛んで残さないように、こぼさないように、先生皆様いただきます」と、先生は「おあがりください」と、園児が「いただきます」というように感謝する心を持つようになります。

１年間の行事をして、真宗保育のテーマである《ともに生き、ともに育ちあう保育を実践しよう》のもと、園長や保育士が園児とともに毎日を過ごしています。

大谷保育協会の年間行事は次の通りです。

①毎月園長会
②６月第３土曜日教職員研修会
③10月南御堂報恩講参詣
④11月第３土曜日教職員研修会
⑤平成16年1月24・25日近畿連区保育研修大会（南御堂、三井アーバンホテル）

教区内の都市化が進んでいる地域は、マンション等が建ち、核家族化が進み、園児も多いが合掌する機会もなくなりました。園児を大谷保育協会の園に通わせるようになり、子どもが合掌することにより、親も合掌することを教えられるのです。それが、家族を目覚めさせるひとつの機縁となります。

今日のように世情の不安定な時にこそ、園児に希望と夢を持って、明日のより良い日本を築いてもらえるように、各園で独自のカリキュラムを組んで保育にがんばっています。今、大谷保育協会と大谷大学とで、よりよいものを作る研究が進んでいます。

（大阪教区真宗大谷派保育協会支部長　頼尊　宗徹さん）

保育研修会

教区アラカルト

和泉国寄講

第22組

桜の花が青葉に変わり、爽やかな風が木々を揺らす頃になると、大阪府の南西部に位置する第22組（泉大津市・泉佐野市・貝塚市・岸和田市・泉南市・熊取町）では、「和泉国寄講（いずみくによりこう）」と呼ばれるお講が、3日間にわたって盛大に営まれる。

会所は、順番をもとに毎年変わるのだが、今年は貝塚市に所在する永覺寺（濱田博徳住職）が当番を担われ、いわゆる大型連休の終盤、5月3日から5日まで勤まった。例年、その中日には大阪教務所からご挨拶に伺うことになっており、今年も私が出向かせていただいたことから、少しくその様子などをお伝えしたいと思う。

まず、和泉国寄講の歴史に触れたいと思うのだが、実は今から30年ほど前、1970年に、第22組の皆さんが『泉州国寄講』という小冊子を発行されていて、そこにはこの国寄講の歴史や過去の様子などを、写真資料などを交えおまとめになられているので、関心のある方はそちらをお読みいただければと思う（同書は教区教化センターにも所蔵されている）。私もご挨拶に伺う最初の年に、ひととおり読ませていただき、この原稿もそれをもとにしているだが、国寄講を大切にされてきた皆さんのお気持ちが、同書からも伝わってくる。

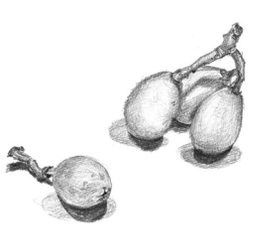
国寄講に関する記録資料としては、文化年間（1800年代初期）のものが現存する最古のものだそうだが、その起こりは正徳年間（1700年代初期）、若しくはそれ以前に遡るということであるから、およそ300年あまりの間、綿々と営まれてきたことになる。

ひとくちに300年というが、その間の社会状況を思えば、それが簡単になし得られたものでないことは想像に難くない。もちろん、社会状況云々と構えてみたところで、私は中学校の歴史の時間に教わったほどの知識しか持ち得ていないが、それにしても「明治維新」による欧米文化の流入、幕末から明治初期にかけての内戦や先の敗戦まで繰り返してきた参戦の歴史、あるいは封建主義・尊皇攘夷・皇国思想・軍国主義・民主主義などの国が採る体制や立場、経済・文化の発展と弊害…この300年という時間の流れは、そういう個人を越えたところで、しかも短時間の間に大きく変化してしまったようなものに戸惑い、悩み、苦しみ、泣き笑いした先達の歴史であり、重ねられた人生の事実なのである。

これは、決して感傷的な思いではなく、私が国寄講という場に身を置くなかで感じたことである。これまでに4回おじゃましたが、いずれのときも寺院周辺は参詣者で賑わい、境内ではお世話する門徒方が忙しそうに動き回っておられる。本堂には、ときには入りきらないほど、ご門徒や坊守方が参詣されている。そうしたなか、ほとんどの組内寺院住職が出仕、勤行され、また、宗派から派遣された教導（特派教導）が法話されるのであるが、寺院関係者も門徒も、国寄講に集うた人々はすべて真剣そのものなのである。

教務所で過ごす毎日にあっては、こうした、いわゆる官製のものではない地道な活動を見失いがちである。私の後には「法義相続」と書かれた瓦墾志のポスターが貼ってあるが、その文字を見るたびに、国寄講に集った皆さんの姿が重なる。これまで先達が大切にしてきたことが次第に失われていくにもかかわらず、そこに危機感を持てない私たちの状況にあって、時代社会の要請や状況を見極めながら、そこにきちんと相続すべきことを相続していこうとする意志と具体的活動が本当に必要なのだということを、拙い挨拶にさえ目を見開いて聞いてくださった皆さんに改めて教えていただいた。

（教務所・杉本）



雨の味 編

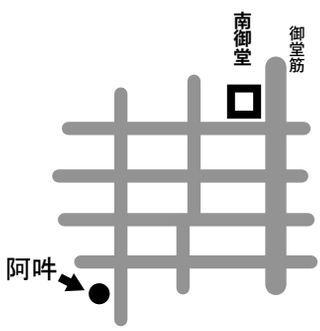
■南御堂周辺のお店紹介

南船場「阿吽」（あうん）

大きな壷のオブジェに感心しながらその小さな店に足を踏み入れると、古い蔵のような造りのイメージに反して薄暗い中にＪＡＺＺが流れる立ち飲みのバーになっています。細い階段を上がった二階はこぢんまりとした二十席ぐらいのテーブル席でした。大勢で押しかけるよりも二、三人でもうすこし飲みながら話そうや、と腰を落ち着けるのに最適な場所です。

日本酒に限らず和洋多種多様な酒の種類、酒のアテにあら塩がでてくるというシブさ、柔な酒飲みはおとといおいでと言わんばかりのこの店は、メインの料理からして『酒粕おでん』。豚骨をベースに煮込み、ほのかに酒粕の香り漂う逸品です。大根や竹輪、牛すじなどの定番から季節限定ものまでおでんは全品百円。枝豆や唐揚げといったお決まりの肴で三百円前後。シシャモの燻製をかじりながら、地酒なら『黒龍』、焼酎なら『吉兆宝山』などいかがでしょうか。

ちょっとひっかけて二千円いくかどうかというお手軽なお店です。飲み足りなかった方、二次会、三次会にぜひどうぞ。（平野）



「阿吽」
大阪市中央区南船場 4-10-2
06-6281-0658
http://www.hattrick.co.jp
営業時間●PM6:00 - AM2:00
（金・土曜 - AM4:00）
定休日●なし

編集後記

◆教区教化事業は新年度を迎え、いま盛んに各部会で会議が進められています。◆『しゃらりん』も、教化活動を各組、各寺院へお知らせするという役割をもっています。楽しく活用していただけるよう、これからも編集していきたいなと思っています。◆2面の「ＢＯＯＫＳしゃらりん堂」では、お二人の方にご紹介を頂きました。『くれよんのくろくん』のご紹介を読んで、ＳＭＡＰの『世界に一つだけの花』も「元気が出る」歌だからヒットしたのだなあと思いました。私もいつの間にか息子を〝みなと一緒〟という枠にはめ込んでいるように思います。私に〝みんなと違っていい〟と言う受け皿がないからでしょうか。◆「全体主義を超えるのは個の自覚しかない」と言われた辺見庸氏の言葉が気になります。◆編集委員の中でパソコンを使えないのは私だけ。原稿をメールで送ったり、意見の交換をしたり校正をしたり便利なものだなあと思っていますが、今のところ覚える気のない私は、隣に居る人に頼るのみ。（W）

発行日：2003年7月1日
発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町 4-1-11
06-6251-4720
発行人：比良正士
編集：第4組　常榮寺・久世見証
第12組　清澤寺・澤田　見
第12組　乗雲寺・渡邉延江
第17組　法観寺・廣瀬　俊
第27組　真善寺・松林俊明
イラスト：第27組　願隨寺・平野圭晋
第9組　看景寺・豊島幸代
http://www.icho.gr.jp/syararin/